

---

# 陽炎、真夏の風

土方沙音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

陽炎、真夏の風

### 【Nコード】

N9779E

### 【作者名】

土方沙音

### 【あらすじ】

亡くした『自分探し』の旅に出た『僕』は、ある寂れた駅に立ち寄る。そこで『僕』が出会った不思議な少女。そして『僕』の旅は

…

ガタンガタンと、目の前を長い長い貨物列車が走り抜ける。

日に十本あるかないかの田舎のローカル線。寂れて誰も居ない、駅員すらいないそのベンチに、僕はいる。当てもない、感性与惰性によった静寂の行脚の果て、この名もわからぬ廃墟じみた駅に辿り着いた。道連れは黒いボストンバックが1つだけ。

ある、七月の話だ。

照る日光を防ぐ屋根すらないここに、もう何時間居るのか、判らない。ただ、貨物の走る音と蝉の鳴き声だけが耳障りなくらいに、もうずっと響いてる。

日光が、鬱陶しい。

ガタン、長い貨物列車の最後尾が走り去った。

「やあ」

ふと蝉の声とは違うものが聞こえた。

聞こえたほうを見ると人が居た。女の子だ。白い肌にふちの大きな黒い帽子と紺の、たしかゴスロリとかいうフリルがたくさん付いたドレス。多分、僕より4、5歳は下だと思う。

「隣にいいかな？」

女の子は僕の隣、ベンチの空きスペースを指した。断る理由もない、僕は彼女を招き寄せた。

「ありがとう」

お辞儀しながら女の子が座る。

不思議な子だ。この炎天下に黒っぽいドレスなんか着ている。なのに額には汗1つ浮いてない。

「どうしたんだい、こんな辺鄙なところに？」

女の子が僕の顔を覗きながら訊ねてくる。綺麗な瞳に、吸い込まれ

そうな、そんな錯覚を覚える。

気付けば口を開いていた。

「亡くした、自分を探してるんだ」

「自分探しの旅、ってやつかい？」

「似たようなもの、かな」

不思議と、話そうとしないことが次々出てくる。

「僕は昔っから他人のイエスマンでね、自分の意見なんてものを持つたことがなかったんだ」

そう、昔からそうだ。主体性なんかなく、他人の意見にすがって過ごしてきた。何年も何年も、依存するだけで『自分』を持たずに生きてきた。

「そして、やがて気がついた。僕は死んでいるって。『自分』を持たない人間はただの肉人形に過ぎないって」

生きてなんかないんだ、僕は。

気がついた瞬間、僕の世界は粉々になった。見るもの聞こえるもの全てに「お前は死人だ」と言われている気がして、気が付けば僕は逃げ出していた。当てもなく、思うままに流されて。

「だから僕は、僕自身を生き返らせる為に自分を探すことにしたんだ」

生き返らせるっていうのもヘンだけど、実際僕は『僕』としては生きていない。

そして、これはとても大変なことだと、飛び出してから気がついた。何せ終わりの無い旅だ。スタートは無価値の崩壊、ゴールは『自分』という見えない何かを手に入れる事。見えない触れないものをどう見つければいい？

「情けない話だけどね。でも、今までの怠惰の代償なら受け入れなきゃね」

「随分達観しているんだね」

「それは君にも言えるんじゃない？」

不思議な子だ。歳の割に妙に大人びた雰囲気、彼女の瞳に、気付け

ば身の上を話していた。良くも悪くも、変わった子だと思う。

「ふふっ、確かに変わった奴だとよく言われるね」

「あっ、ごめん。気を悪くさせてしまったかな？」

謝罪すると、彼女はふふつと微笑んだ。

「気にはしなさ、ボク自身そう思うからね」

そういつて、ベンチから立ち上がり、僕の前に来る。向き合う形で、彼女は身をかがめて僕を覗き込んでくる。

「君は、今までどれくらいの人間にあってきたんだい？」

いきなりそう聞かれた。最初、何のことを言っているのか判らなかった。

「コレはボクの私見だけだね……『自分』っていうものは、その人間の歩んだ道のりに沿って形作られるものだと思うんだ」

遅れて、この子の言いたい事がわかってきた。彼女は、恐らく僕の旅の終焉を示そうとしているのだろう。自我の精製法、とでも言うべきものを。

「人はね、一人では生きていけないんだ。他人と交わり、励まし競い、暖めあう」

彼女の言うことは判る。人が 生物が生きていくにはどうしても『他人』が必要だ。愉楽だろうが、衣食だろうが、生存だろうが。

「だけど、人は他の人の考えることはわからない。超能力者ではないからね。君は……どうかな？」

おどけた風に訊ねてくる。勿論僕はそんな特別なものではない。何処にでも居る平凡な、でも何処にも居てはいけないものだ。

「ふふっ、そう自虐にならないで。ともかく人間同士には相手を理解しきれない壁があるんだ。誰にだって隠しておきたいこと、知られたくないものがあるからね」

「君にもあるのかい？」

ふと、おもわず僕は訊ねていた。すると彼女はキョトンとした表情をして、次にはクスクス笑っていた。

「そりゃあるさ。ボクにだって秘密の一つや二つ、乙女の謎ってヤ

ツがね」

彼女はそう言い、その場でくるっとステップを踏んだ。  
思わず吹き出してしまった。

「むう？　なんか感じ悪いなあ……」

「ははっ、だつて随分ませたこと言うからさ」

しばしの沈黙。すると彼女はごそごそとドレスのポケットを漁り、  
財布のような物を取り出す。そこから一枚の紙を出して僕に差し出  
してきた。それを受け取り眺める。

「保険証？　……えっ、同い年！？」

そこにあるのは、僕と同じ年に、彼女が生まれたという公的証明。

「初対面の女の子に、ちよつと失礼なんじゃないかな？」

「ごっ、ごめん……」

「それでも気にしてるんだからね、背が小さいのは」

頬を膨らましながらそっぽを向かれてしまった……まいったなあ。

初対面の子に随分と粗相をしてしまった。

「ごめん……だから機嫌を直して？」

「……まあ、反省してるならいいけどね。話を戻そう」

「ごめんなさい……」

一応許してくれたらしく、彼女は再び僕の隣　今度はベンチの反

対側　に座ってきた。

「とにかく、人間には壁があつて、他人を遠ざける。一番深いこ  
ろには誰も入れさせない」

ふと、彼女が帽子を脱いだ。短い、透き通るような蒼い髪。空の  
色、海の色ともいえる、だけどどんな青よりも蒼らしい。

風が、吹いた。今まで蒸し暑いだけの駅に、風が駆け抜けた。

彼女が立つ。その小さな手には大きな黒い帽子。それを、

「あ……」

風に乗せるように、それを投げた。

何処までも、黒いそれは高く、何処までも高く飛んでいく。

「けどね　」

声に振り向く。風に髪をなびかせながら、帽子を見つめながら少女は言う。

「他人と壁があるからこそ、自分を認識できるんだよ。君はボクを小さいと言った。『他人』の君はボクをそう認識し、ボクは『自分』のカタチを思い知る。言葉に善悪はないけど……聞き手の捕らえ方でそれは色付く」

気が付いたら、彼女に向かい合っていた。持っていたはずのバツクなんて、とつくに手から落ちていた。

「君は……」

「んっ？」

「君は 誰？」

「それを決めるのは君さ。けど」

ぐいつ、と目の前一杯に彼女の顔がある。両手で顔を掴まれて、向かい合わされている。彼女の綺麗な瞳が、僕を見つめる。

「君にとつて、ボクとの出会いが、良かったって思えるものなら僥倖さ」

手に力がこめられる。彼女の方へと引き寄せられて……。

誰も居ない、名も無い駅のホームに僕はいる。蝉の声だけが絶え間なく、怒号のように鳴り響く。当てもない『自分探し』の旅。感性と情性だけでここまで来た。旅の道連れは黒いボストンバツクが1つだけ。

遠くからガタンガタンと電車の足音が。後は蝉の声だけ。

「少しだけ……」

目の前を通り過ぎる列車。長い長い貨物列車。

「少しだけ、わかった気がするよ」

通り過ぎる列車。少し短い。蝉の声は相変わらず。

僕はホームから線路に降り立った。後ろはトンネルがある。出口が見えず、長いと判る。けど前には何処までも続く二本のレール。果ては見えないけど、この先には駅がある。

夏の日差しは、何処までも照らしていく。僕は、手に持っていた黒い、ふちの大きな帽子をかぶって、レールに沿って歩き出した。

この旅の終わりは見えないものを見つけること。途方もないことだ。

「でも」

帽子のふち越しに空を見る。風が、吹いた。蒸し暑いだけの日差しに、肌心地のよい風が加わった。

風は唇になびき、蒼い匂いを残していった。

ある、七月の話だ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9779e/>

---

陽炎、真夏の風

2010年12月12日14時52分発行